

転生オリ主はモモンガ さんを救いたい

蘇芳裕美

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幼少期に風邪をひいたときに前世の記憶を思い出した。

「え、此処って、オーバーロードの世界じゃん。」

「モモンガさんがアインズ様になり、異世界転移のちにいろいろあって、デストロピアにな
るつてダメじやん。」

頭を抱えながら自分が知りうる知識を記憶から引っ張り出して今後のことを探索す
る。

「大好きなモモンガさんを助けたい。あの天元突破の忠誠心は精神すり減らすし、もし
ギルドメンバーが数人でも最終日に戻つて来てくれたら……。」

モモンガさん大好き、ナザリックの皆大好きなオリ主が持てる財力とない知識で異世界で頑張る話……かもしれない。

目 次

序章～転移までのあれやこれ～

此処つて。……オーバーロードじや

ん。

助けてくれたあの人はリアルでは姉の

旦那様兼幼馴染みでした。

――――――――――――――――――――

4

PKされてたのを助けたらあの方々で

した！（後日談という名の女子ギルメン

とのお茶会）

10

1 此処つて。……オーバーロードじゃん。

序章／転移までのあれやこれ／ 此処つて。……オーバーロードじゃん。

その日私は熱を出して、夢を見た。

次々と流れる映画みたいな映像、今の世界とは違ひ緑があり、液体食品しか口にしたことないのにその夢では懐かしささえ感じる食べ物。

通勤途中か登校中かは定かではないが横断歩道を歩いていると向こうからトラックが迫ってきた処までで目が覚めた。

「つづ！…はあ、はあ、ゆめ…。」

（夢にしては生々しいし、私はあの時…死んだのか…。今の時代はある頃のように星は見えないし、この区域以外の移動は防護服やガスマスクがいる。予想が正しければ私はあの書籍の世界に転生したのか。）

頭を抱えながら思考する。

（もしそうなら、これからユグドラシル配信があり配信終了したら異世界転移する。モンガさんがディストピア作っちゃう！いやいやいや、そうしないためにも配信開始まで知識とか体力作りして少しでもモモンガさんと仲良くなつて、NPC達とも友好を

作つてギルドメンバーも何人か最終日に来てもらえるようにしなきや。)

悶々とこれから計画を頭で組み立てる。しかし考えながら、ふと思う。

(モモンガさん大好きだけど仲良くなれるかな…。それにモモンガさんのタイプってアーベドみたいな美人さんだし、私はそこまで美人でもない…。はあ…、とりあえずは資金作りして、出来るだけ課金に注ぎ込みたい。)

色々考えていたらまた頭がグルグル回ってきた。

(やばつ、熱出してたの忘れてた……。)

そのまま私は意識を手放したのだつた。

熱が下がった七歳から身体能力を上げるために筋トレや武道の道場に通つたり、毎月のお小遣いやらお年玉を貯金に回し、バーチャルマシンを誕生日に親から買ってMMOゲームを片つ端からプレイしていた。

3 此処つて。……オーバーロードじゃん。

バーチャルマシンを使用するときは必ず姉と一緒にプレイしていた。最終的にはあまり乗り気でない姉だったが兄みたいな幼馴染みもDMMOゲームに嵌まっているみたいで話のタネにしている。

そうして14の年にDMMORPGゲームユグドラシルが体験版としてβ版が配信とゲームの広告で見た。

今回のβ版はテストケースであり、ユグドラシルが本格配信されたときにβ版のプレイヤーデータは移行出来るようになっていた。

しかし、β版で獲得しているアイテムは1部移行は出来ないと画面説明欄には記入されていた。

そして⋮ユグドラシルのタイトル画面を目にした私の反応はというと⋮⋮⋮

「⋮此処つて、やつぱりオーバーロードじゃん⋮」

画面を前にふたたび頭を抱えながら呟いたのだった。

助けてくれたあの人はリアルでは姉の旦那様兼幼馴染みでした。

オリ主視点

β版から本格配信して数ヶ月。異形種にしていたため、わかつてはいたが被害にあつた。レベリングと職業の獲得のため一人で散策しているときに限つて人間種数人のパーティーと当たつてPKになる。

うう、不可視の魔法と気配阻害の魔法掛けたのに、今回は間が悪かつたのか何とか煙に巻こうともうまく行かず…

「今日は野狐じやなくて、天狐じやん。特殊クラスのポイントゲットだぜ。」「速くトドメ指しちゃえよ」

「あせんなつて、もうHPギリギリじやん、ゆつくりいこうや」

この、ドグサレ人間種の阿呆パーティーめ。一人じやなんもできんくせに寄つて集つて異形種狩りしやがつてー!!

這いつくばつて人間種パーティー（という名の外道）達に表情は変わらないけど苛立

5 助けてくれたあの人はリアルでは姉の旦那様兼幼馴染みでした。

ちは隠せず心で悪態を吐いていたその時次々と人間種パーティーは切られてロストされていく。

其処には白銀の鎧を身に纏つた如何にも騎士が仁王立ちに立っていた。
「危ない処を助けていたたき感謝致す。じゃが、見ず知らずの妾をどうして助けてくれたのじや？」

膝を付き見上げて問いかける私にその騎士は言つた。

「誰かが困ついたら、助けるのは当たり前!!」

後ろに大きく正義降臨と書かれたエフェクト付にポーズを決める。

(あ、あれー?これってたつちさんじや、つてかこの声は!)

聞き覚えのある声に思わず

「その声、お兄ちゃん!!」

ロール用の声色を忘れて私は目の前の騎士を指差しながら叫んでいた。

「えっ! その声つて、ウンちゃん……」

……そして、私の声を聞いた騎士、もといお兄ちゃんも畠然とした声で答えたのだつた

あれから数分後……

ログインして来た姉も合流していた。

「もう、ユンは一人で先に行かないの！ 唯でさえ異形種狩りが多いんだから。たつちが助けてくれなかつたらデスペナでまた、一からレベリングし無きやダメだつたでしょ！ 唯でさえ戦闘特化のビルド構成にしてないんだから！」

「あはは、ごめん、お姉ちゃん。気をつけてはいたんだけど間が悪かつたみたいでPKされかけちゃつた。」

「いつも、私と一緒にログインする約束だつたでしょーが！」

「まあまあ、ユンちゃんも遭遇するとは思つても見なかつたつて謝つてるんだから。それに俺もユンちゃんやあや「らぶ・みー！」……いや、あのな、らぶ。つてプレイヤー名が恥ずかしい……」

「なんですつてーーー！」

「まあまあ……」

いや、痴話げんかなら他でして下さい、お姉様方。新婚ラブラブなのは非リアにはツラいのよ。つてかお兄ちゃん、昔からお姉ちゃんの琴線無意識的に触れるから……

7 助けてくれたあの人はリアルでは姉の旦那様兼幼馴染みでした。

ピコンピコンと怒りチャットを出しながら怒るお姉ちゃん事らぶ・みー。焦りチャットを出しながらホールドアップするお兄ちゃん事たつち・みー。

二人の間でお姉ちゃんを落ち着かせようとする私。
つてか、注意されてたの私だつたような…

「それにもしても、夫婦揃つて同じゲームに嵌まるとは…、此処でもリア充ですか、非リア
に対して当てつけてるとしか思わないんだけど…」

「ユンが面白いって勧めてくれたからはじめてみたけどこれが、面白いすぎて」

「でも、ユンちゃんはあれでしょ、ティムとかサモナーとかのゲームしてたよね。確か一

世紀くらい前の…」

「してたよー。会話して仲間にして、ストーリーを進行して会話の選択でルートが変わ
るゲーム。あのゲームつて人の概念？正義の見方が違うから全ルートやつてみて思つ
たけど何も善政だけが正しい訳じやないんだよねー。だからお兄ちゃんもやつてみた
らしいと思うよ。…でも、お兄ちゃんの場合は何回やってもあのルートにしか行かなさ

そう

「ええっ、ウンちゃんヒドいなー。僕が他のルートは行けないって言つてるみたい…」「じゃなくて、たつちの場合は自分の正義感で選択選ぶからウンの言うとおりそのルート以外はいけないってことよ。」

森林フィールドを散策しながらユグドラシルとは関係ないゲームや世間話をする。

先程助けてくれた姉婿事、全身白銀の鎧を身に付け肩には紅いスカーフがトレードマークのたつち・みー。

その横を歩く姉事、金の長い髪がふわふわ揺れ、頭の所には綺麗な花の冠、若草色のワンピースドレスの後ろ背にはフエアリーの羽根をもつ。種族は確か妖精女王（フエアリーケイーン）のらぶ・みー。

二人より頭二つ分低い背丈。紫銀の長い髪に頭の上には大きな狐の耳、平安時代に公家が着ていたとされる狩衣。特に歩くたびに揺れる大きな九本の尻尾。初期種族野狐から課金種族ガチャで上位種天狐の私、アバター名ウン・リー・フォックス。
三人ともリアルでは幼馴染み兼身内なのだ。

9 助けてくれたあの人はリアルでは姉の旦那様兼幼馴染みでした。

「まあ他のゲームの話は此処までにして、お兄ちゃんはお仕事大丈夫なの？」

「うん、研修は一段落したし赴任先が決まるまでは時間があるからね。それに、このゲーム内の雰囲気はどうにかしないと、楽しくプレイしている異形種のプレイヤーはこれから先引退していく事になる。」

「たつちと話していく、悪質なプレイヤーはお灸を据えてやろうって、この前話してたんだ。」

「ウンちゃんも一緒に異形種プレイヤーの救済をしないか？」

「確かに運営は異形種狩りに対し違法とか規制はかけてないから、初心者プレイヤーはヤル気を阻害されて引退するしかない。それを助ける活動をしようってことか。……良いと思うよ。私もお兄ちゃんに助けられたから出来るだけ協力するよ。」「そうと決まればこれから目に見えた困った人は救済していくこうー！」

そして、私達は異形種救済活動を始めたのだつた。

PKされてたのを助けたらあの方々でした！（後日談と
いう名の女子ギルメンとのお茶会）

救済活動を開始して数ヶ月後の森林ファイールド。

この数週間色々なワールドエリア各地で異形種狩りが多発していた。ある者はスキルポイントや経験値のため、ある者は相手のアイテム強奪等楽しくプレイするプレイヤーにはリアルのように擁取される状況であった。（見ていて不快、低俗、外道の行いだわ。これじゃあ、リアル世界の1部富裕層だけのやり方と変わらない…。）

ヒュンツと装備した鉄扇と鉄線をならしながら、袖にしまう。くるりと今まで人間種パーティに被害にあつていたプレイヤーに振り返る。

紫銀の長髪に大きな紫銀の狐耳、特徴的な9本の尻尾、白の狩衣姿は平安時代の白拍子の姿見。

「助けていただいてありがとうございます。貴方が紫銀の白拍子さんですか？」
「…。なんですかその紫銀の白拍子って、私は唯の通りすがりですよ。散策してたら異形種狩りの場面に出会つたら…手を貸したに過ぎません…。」

言われた二つ名に狐の少女はアバターゆえ表情は判らないが声色と動作が恥ずかし
そうにモジモジしていた。

助けられた半巨人（ネフイリム）のアバターはその狐の少女を見てくすりと笑った。
「ふふ、ああごめんなさい。仕草がとても可愛らしくって、僕は半巨人（ネフイリム）の
やまいこつて言うの。貴女は？その声からすると同性ぽいから。名前教えてもらつて
もいいかな？」

「ふあっ、か、可愛いって、確かにこのアバターは可愛いんですけど、私はつつつ。」

「あー、落ち着こう、ね？」

（わあわああ！やまいこさんだー。後のユリを創造するやまいこさんだー。）

相手の言葉に内面も受け答えも慌てる。

何とかやまいこも少女を落ち着かせようと声をかける。

そして、数分後：

「や、やまいこさんはじめまして、ウン・リー・フォックスって言います。」

「えつと、なんて呼べばいいかな？ウンちゃん、それともフルネームかな？」

「ウンでもリーでもどちらでもわたしはやまいこさんって呼んだら良いですか？」

「あー、ウンちゃんって呼ばせてもらうね。僕のことはやまいこでもまいこでも呼んで

いいよ。」

「じゃ、じゃあ、まいこさんで。」

「コニコニとチャットエフェクトを二人共出し握手をする。

「まいこさん、どうして一人だつたんです？今はソロで異形種が活動してたらさつきみたいな阿呆パーティーの餌食ですよ。」

「あー、他に三人と散策してたんだけどさつきのパーティーに襲撃受けちゃつて散り散りになつちゃつたんだよ。」

「えっ？！じゃあ、早く探しないと？」

「落ち着いてウンちゃん。あの三人は早々負けたりはしないから。」

その時向こうの方角から呼び声が聞こえる。

「あー、まいちゃん此処に居たー。大丈夫だつた？！アイツらまいちゃんの所について誰？この子」

「美少女狐さんー！俺、ペロロンチーノつて言います。可愛らしい貴女のお名n aへぶああ！」

「バキヤアアア！！

「なあああに、いきなり口説いてやがる愚弟！つ！ああ、ごめんね。いきなり馴れ馴れしくて、貴方がまいちゃんを助けてくれたのかな？」

「え、あ、う…」

ユンの目の前で種族の判らない異形種が半巨人（ネフイリム）のやまいこに話しかけ、鳥人族（バードマン）の男性が詰め寄つて行き、真つ赤なスライムに盾で吹つ飛ばされるという光景を見て、スライムの人は声からして女性で、話しかけられ返答に困るユン。しかし、脳内では原作の回想に現れるギルドメンバーの三人に出会つたことが嬉しかつたのか思つてることは言葉とは裏腹に狂喜乱舞状態だつた。

（キャーキャー、もしかしなくてもあの人はあんころもつち餅さん、この吹つ飛ばされた男性がペロロンチーノさん、このスライムさんはぶくぶく茶釜さん！今日はなんて素敵な日なのー。）

こんな感じである。

そうして、一騒動が落ち着いて合流した三人と自己紹介をした。

「えっと、ユンちゃんこつちの子があんころもつち餅さん。支援系魔法詠唱者で、こつちの鳥人族（バードマン）は狙撃手のペロロンチーノ君、そしてスライムのぶくぶく茶釜さん。茶釜さんはタンク役なの。そして、茶釜さんとペロロンチーノ君は姉弟なのよ。」「はじめまして、天狐族（てんこ）のユン・リー・フォックスです。一応暗殺者（アサシン）系です。少し剣闘士（ウォリアー）系とかも取つてます。」

笑顔のエフェクトを出しながらお辞儀するユンに懲りないのかすぐに距離を詰める

鳥人族（バードマン）

「ユンちゃんつて言うのが、よろしくねー。俺の事はペロロンさんでもペロさんでも好きに呼んでね。それと良ければスリーサブファアアア!!」

バキヤアアアア!!

「オマエは、少し黙つてろ!!」

底冷えするくらいの低音で怒氣を含めながら装備の盾でフルスイングして鳥人族（バードマン）を吹つ飛ばすライムのぶくぶく茶釜。怒氣エフェクトがピコンピコンと連発で表示される。

フレンドリーファイヤは無いのでダメージは負つていないが飛ばされた本人は地面に臥している。

「あー、あつちは少し放置で大丈夫……かな?」

「まいちやん、まいちやん、目線が遠くに行つてる。それにユンちんでいいかな?私はあんころもつち餅です。あんでももつちでも好きに呼んでね。」

「じゃああんさんで。向こうのペロロンチーノさんでしたか?にお説教しているのがぶくぶく茶釜さんですね。」

「茶釜ちゃんの紹介はペロロンさんのお説教が終わつてからだね……。」

三人とも向こうで行われている光景を遠い目をして見守っていた。

「あの時は私だけユンちゃんに自己紹介するのが遅れたのよねー。」

「あはは、あれはペロロンさんが悪いって。最初のアバター見たときにナンパするから。」

「へえ、そんなことが……。ペロロンチーノ君は家のと一緒に後で闘技場集合だね。」「ら、らぶさん穩便にね。」

此処はナザリック大墳墓第六階層闘技場の一室ぶくぶく茶釜のプライベートルームにしている場所。

当時の記憶を振り返り数少ない女性ギルドメンバーのお茶会、其処には聖騎士ことたつち・みーの妻らぶ・みー、彼女の実妹のユン・リー・フォックス、今は変化の術で

一世紀前に絶大な人気の執事漫画の登場人物で葬儀屋（アンダーテイカー）になつている。

そしてお馴染みのぶくぶく茶釜、やまいこ、あんころもつち餅がテーブルを囲んでいる。

ぶくぶく茶釜の当時の事を聞いて少し低い声をだしながら答えるらぶ・みーにたいして苦笑いのような声でなだめるやまいこ。

「ヒヒヒ、小生の姿の時はティカーカリーと呼んでおくれよ。そしてお姉さんは血の気が多いねー、余り鳥君を虐めないでおくれよー。ヒヒ」

「いやいや、茶釜ちゃんから了解貰つてし唯の模擬戦という名の制裁よ。それより、ほーんとティカーは規格外よね。他の姿にもなれるけどナザリックに居るときは徹底してその姿かえつとスライムだつけ、あの姿が多いよね。元の姿には戻るつもりはないの？」

「確かにアバター同士の触れ合いにペナルティつかなきゃあの尻尾を存分にモフりたいのに。」

「ヒヒッ、あんさんは声色からしてすこーし怖いねー、元の姿になるのは此処ではしないねー。ギルドメンバー達は聖騎士君（お兄ちゃん）と鳥君（ペロロンチーノさん）が口を滑らせなければ大丈夫だと小生は思うよ」

ティカーの言葉に楽しそうに答えながら元の姿に対する質問をするらぶにあんころもつち餅が食い気味に問い合わせてくる。慌てるアイコンをピコンと出しながら両手を胸の辺りで振りながら答えるティカー（ユン）は先程の質問に答えた。
「ふふ、たつちに対しても私は私の方で何とか出来るしペロロンチーノ君は茶釜ちゃんが対処してくれるでしょ。」

「ふふふ、らぶさん任せて！愚弟の方は黙らせて言い含めとくよ。」

「「……うわあ……」」

このスライムと妖精女王（ティタニア）は不気味な笑い声を出しながら今後の対策？をしているのを今後ある不幸にであうであろう聖騎士と鳥人族（バードマン）に心のなかで合掌しながら不憫なこえを上げて二人を遠い目で見つめるのであつた。